

中国医経の新研究

真柳 誠

『漢書』芸文志の「医経」には『黄帝内经』など前1世紀の文献が著録されるが、いずれも現存しない。1～2世紀には『素問』と『九卷』（のち針経・靈枢）の原本が編纂され、「医経」と認知されてきた。さらに同系の『難経』『明堂』『甲乙経』『太素』も出現している。最近、当6文献の成書と伝承史についての論考を一書としたので、概略をのべたい。

【素問】 1世紀初頭の成書で、全元起本（約500）と王冰次注本（762）をへて、五代～北宋初に運氣七篇の経文と注文が増入されたい。亡（遺）篇は北宋初の捏造である。宋版では既知の熙寧新校正本（1069）以外に、新知見の元豊本（1078-85）・宣和本（1121）・紹興本（1155）・紹定本（1228-33）と南宋中後期本・未詳年本があったが、みな散佚している。現存する金版以降の来歴と系統も解明できた。熙寧本の覆刻が紹興本で、紹興本の影刻が現存の明顧從徳本だった。元豊本の系統が元版2種、宣和本の系統が室町古鈔本、元豊・宣和・紹興本系の混合本が金版だった。顧從徳本には初刻本と補刻本があり、補刻校記を削除した偽装宋版まで出現している。問題だった明仿宋版2種は、顧從徳初刻本および明無名氏の顧本海賊版だった。

【九卷・針経・靈枢】 2世紀前後に成書の『九卷』は、隋の医官教材で『黄帝針経』9巻に改称されたい。唐代に針生の必修書とされ、新羅・高麗と日本でも同様に規定されたが、北宋になるとほぼ亡佚していた。旧法派の王欽臣が高麗から帰国後、高麗に献本させた書に完本の『黄帝針経』9巻があり、刊行したのが元祐本（1093）である。翌年から新法派政権が北宋末まで続き、旧法派による「偶存於東夷」の元祐本は重印されず、元祐本などに基づき王冰時代の古本を偽装した『靈枢経』9巻が作成（1116～18）され、のち亡佚して

いる。南宋では秘書省になかった元祐本を史崧が献上した。これに着目した高宗侍医の王繼先は『黄帝針経』9巻を『黄帝内经靈枢』24巻に改変して元祐本の証拠を消去し、紹興本『黄帝内经素問』24巻とともに「黄帝内经」として合刻（1155）した。さらに繼先の失脚（1161）で南宋の重印本は彼の序跋等を削除、目録書も史書も紹興本を黙殺したため当経緯が闇に埋もれていた。紹興本『靈枢』（佚）は元代に翻刻され、その元版（佚）を翻刻した元古林本と明無名氏本が現『靈枢』の祖本である。無名氏本『靈枢』は顧本『素問』の海賊版と合刻され、仿宋版と誤認されてきたが、宋版風に彫板したにすぎない。

【難経】 2世紀中後期の成書で、現存本は明版以降しかない。近年、ロシアの東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部に所蔵の敦煌本が、『難経』の断簡と報告された。4～5世紀の『明堂』断簡と合綴されていたので、筆写年代も同一らしい。敦煌本は現行本の53・38・39・25・68難の順で記述され、敦煌本→現行本の表現には問曰→○○難曰・元氣→原氣などの変化もあった。現行本は楊玄操が621～30年に従来の順次を改め、13篇に改編した書に基づくので、敦煌本は玄操以前の旧態を示唆するだろう。

【甲乙経】 現行本12巻は皇甫謐による256～82年の編と通説されてきたが、実際は4世紀後半の無名氏編『黄帝経』10巻だった。サンクト・ペテルブルクには約5世紀の敦煌本断簡がある。523年以前に孔穴図2巻が付録された『黄帝甲乙（ないし針灸）経』12巻となり、隋の医官教材では図2巻を削除して音釈1巻を付録した。楊玄操以前の7世紀前後に皇甫謐撰に仮託され、唐の医生教材の校定では巻8～10を巻8～12に分巻、ふたたび12巻本となって現在にいたる。パリとロンドンに所蔵される敦煌本断簡は唐政府の校定本系

だろう。のち北宋熙寧の初校刊大字本(1069)、元祐の再校刊小字本(1088)、政和の再々校刊大字本(1103~14)が出版されたが、いずれも散佚している。現存本では北宋の再校刊本に由来するのが明医統本、再々校刊本に由来するのが静嘉堂文庫の明抄本だった。

【太素】 675年に本書30巻と上善『明堂』13巻を奏上した楊上善(589~681)は、唐の高宗と則天武后の子・李賢が親王と太子の期間(661~80)に侍し、高宗の侍医(659~74)だった孫思邈と面識があっただろう。武后が李賢の太子を680年に廃し、684年に自死させたため、上善の奏上本も東宮の太子図書館・司経局にあった稿本も秘匿された。司経局での校書を721~27年に初任官したのが阿倍仲麻呂で、すでに李賢の名誉が回復されていたため李賢関連書の鈔写を認可されたか、下賜されたい。仲麻呂は玄宗に帰国を上請したが許可されず、『太素』ほかを約20年の異国生活をともにした吉備真備に託し、735年の真

備帰朝で日本に伝来した。中国では北宋末期の金軍侵略で亡佚した。日本での『太素』初出は『続日本紀』757年の孝謙天皇勅で、同勅にある『明堂』も上善『明堂』にちがいない。『太素』は平安の全期にわたり流布、14世紀以降は伝本が消滅し、公家政権による医官育成の消長と並行していた。ただし仁和寺は皇族が歴代門跡をつとめた関連で、丹波氏奥書の医書を16世紀末に収蔵したらしい。仁和寺の『太素』『新修本草』および上善『明堂』は、京都の福井棗園と尾張の浅井正翼、江戸の狩谷掖斎・小島尚質の連繫があり、1831~42年にかけてほぼ全貌がしられていた。(与えられた紙幅をすでに超過したので、これ以下の『太素』と『明堂』は割愛する)。

【結語】 拙著で検討した6文献の伝承や消長におよぼした歴代王朝の施策、さらに政変・戦乱の影響は甚大だった。その過程には傑出した人物の貢献も多々あった。

(平成26年12月六史学会合同例会)

日本のワクチン産業史の新時代なのか？

—— HIB ワクチンの日本承認をめぐる ——

ジュリア・ヨング

感染症の大流行(はしか, 2007年), ワクチンの供給不足(新型インフルエンザワクチン, 2008年), ワクチンによる副反応問題(子宮頸癌予防ワクチン)によって、この数年間は、日本の健康保健機関, 医師, マスメディアに加えて一般市民の間において「ワクチン」に対する意識が高まってきた。しかしながら、ワクチンは、決して新しいテーマではない。ワクチン産業は、19世紀にドイツやフランスで形成され、発展していった歴史がある¹⁾。ドイツに留学した北里柴三郎が、ヨーロッパ、とくにパスツールやコッホ研究所の機能(研究・製造・治療)や運営の仕組みを参考にし、日本に導入し、定着した。現在、日本ではその運営の仕組み、いわゆる当時の「ビジネス・

モデル」に基づき、大半の国内のワクチン製剤は、輸入(多国籍企業依存)ではなく、日本国内のinstitute(研究所)のワクチン製造によって、供給されている²⁾。

1950年代のポリオ・ワクチンの発明によって、世界のワクチン産業が黄金時代を迎えた。しかし、1970年代以降に副反応問題が発生し、それによって、ワクチンそのもの、また、ワクチンを製造する製薬産業に暗い影が落ちる。そういった状況において、とくに1980年代以降、欧米のワクチン製造業者の撤退やメーカー同士の吸収合併が相次いで、巨大なグローバル・ワクチン企業の5社が誕生した。一方、欧米のワクチン産業の厳しい再編成のなかで、技術面およびマーケティング